



## (((( ( 技術・行政情報 ) ))))

表1 英国主要発電会社における、燃料ミックスの推移 1990-1994 (石油換算百万トン)

	1990	1991	1992	1993	1994
石炭	82.6	82.0	77.0	64.1	60.7
石油	11.6	9.9	8.4	7.4	6.1
ガス	—	—	1.7	10.5	15.4
化石燃料合計	94.2	91.9	87.1	82.0	82.2
非化石燃料	28.0	30.6	32.9	37.3	37.5
合計	122.2	122.5	120.0	119.3	119.7

出所: John Surrey, ed. "the British Electricity Experiment, Privatization: the record, the issues, the lessons," Earthscan, 1996, p. 121

表2 原子力 (Nuclear Electric 社) へのNFFL支給内訳推移 (百万ポンド, 名目価格)

	1990/1	1991/2	1992/3	1993/4	1994/5	Total
1 支払総計	1195	1265	1280	1230	1251	6221
2 過去の負債返済 (内廃炉費用)	485	522	577	605	1097	3286
3 残金 (1-2)	9	9	6	17	21	62
	710	743	703	625	154	2935

出所: 同上, p. 154

表3 1994年NFFO契約内訳

	契約設備 (MW)	プロジェクト数	平均価格 (p/kWh)
風力 (>1.6MW)	145.92	31	4.32
風力 (<1.6MW)	19.71	24	5.29
水力	14.48	15	4.4
廃棄物発電	241.87	20	3.84
排気ガス	82.07	42	3.76
バイオマス	19.06	3	8.65
その他	103.8	16	5.07
合計	626.91	151	4.35

出所: 同上, p. 174

派や専門家からも批判が既に出始めている。

原子力の苦しみは研究開発にも及んでいる。規制緩和以降R&D予算は大幅に減少。発電会社全体のR&D支出を見ると、88/89年の2億ポンドが94/95年度には0.9億ポンドへとほぼ半分以下に削減されている。ただし、この中身を見ると、削減のほとんどが原子力関連であり、非原子力関連はほぼ横這いというのが実態のようだ。当の「ブリティッシュ・エナジー」でさえ、「原子力の新規発注は当分考えていない」という状況では、原子力の見通しは決して明るくない、といえそうだ。

再生可能エネルギー: 規制緩和が実施されるまで、再生可能エネルギーへの支援措置はほとんどなかったといっていい。原子力の救済を主な目的として導入されたNFFO, NFFLであったが、その後再生可能エネ

ルギーが対象に加えられるやいなや、再生可能エネルギーが急速に伸びた。NFFOは大きく二つの目的に用いられる。まず、政府の公表する目標設備能力 (現在は2000年までに150万kW) に、達成できるよう各電力会社が再生可能エネルギーを発注。受注されたプロジェクトには、電力会社が購入するプール価格と再生可能エネルギーの発電コストの差額をNFFLから援助する。もう一つは、研究開発への援助である。NFFO以前の研究開発プログラムでは、波力発電、地熱発電 (特に高温岩石) が主な支援の対象であったが、NFFO以降は風力と廃棄物発電が主な支援の対象となっている。支援発電プロジェクトも、94年のNFFO契約リストを見ると、全契約 (627MW) のなかで都市/産業廃棄物発電が最も多く (242MW)、次いで風力 (165MW) が圧倒的なシェアを占めている。また、設備容量の伸びと共に発電コストも徐々に減少。特に風力は11ペンス/kWhから4.3ペンス (1.6MM以上) -5.29ペンス (1.6MW以下)/kWhと大きくコストダウンに成功している。

英国の規制緩和 (民営化) はようやく第1段階を終えたところだ。サセックス大学研究グループも、長期的なエネルギー供給の問題や、研究開発への支援、NFFO/NFFL廃止後の発電ミックス、等について、今後とも分析を続けていく必要性を訴えており、まだまだ最終的な成果は不確実と言えるだろう。

(財)電力中央研究所 研究主幹 鈴木 達治郎)